

## 第 23 回国際測地学・地球物理学連合総会報告

木下正高\* 上田誠也\*\*

### The 23rd General Assembly of the International Union of Geodesy and Geophysics

Masataka KINOSHITA \* and Seiya UYEDA \*\*

2003年6月30日(月)から7月11日(金)まで12日間にわたり、北海道札幌市にて第23回国際測地学・地球物理学連合総会(IUGG2003)が開催された。80カ国近い国から、これまでのIUGG総会の参加者数を上回る、4,500名をこえる参加者があった(表1)。本大会は日本学術会議と地球科学関連16学会<sup>1)</sup>の共同主催の大会であり、運営は組織委員会により行われた。上田は組織委員会の委員長として、また木下はその総務部長として、大会の全般を見渡すことができる立場にいたので、ここにその概要を報告する。

本国際会議は、国際測地学・地球物理学連合(IUGG)が4年毎に開催する会議であり、地球・惑星科学研究及びその国際的な展開の促進を目的として開催されてきた。今回、札幌市での開催はアジアでは初めてであった。総会の統一テーマは「この惑星(ほし)の今: 未来への挑戦(State of the Planet Frontiers and Challenges)」とされ、この統一テーマによる6つのユニオンセッション(「予測・予知およびその可能性」「火山性島弧の揮発性物質: 沈み込むスラブから成層圏まで」「地球システムと環境変動」「地球物理学的災害と人口過密都市の持続力」「地球内部の構造とダイナミクス」「地球を測る新しいセンサー: 何が可能か」)をはじめ、各セッション・集会が開催さ

れた。申込論文数は7,121件だったが、このうち実際には5,137件の発表が行われた。IUGGでは投稿料が無料であることなどがこの差を生じた原因と思われるが、一方で若手や発展途上国からの参加を奨励するため、組織委員会およびIUGGでは参加料・旅費等を補助するグラントを設けた。グラントの支援を受けて参加した研究者数は497名に達した。また、研究セッションと並行して実施された学術見学旅行は、国内とフィリピンで計6コース実施され約320名が参加した。規模ばかりではなく、学術レベルおよび運営面でも最高の総会であったとの多くの参加者からの賛辞は関係者すべての喜びとするところである。開催地として美しい自然、薫り高い文化に恵まれた北海道札幌市をえらんだことも、成功の大きな要因であった。

本大会では、科学セッション以外のイベントも数多く開催された。7月2日に開催された歓迎式典では、天皇皇后両陛下の御臨席を仰ぎ、天皇陛下よりお言葉を賜ったほか、池坊保子文部科学省政務官(当時)のご挨拶、小泉首相からのメッセージ等をいただいた。陛下のお言葉には、聞き入る方々から賞賛の感想をいただいた(<http://www.kunaicho.go.jp/okotoba/okotoba-h15.html>)。またアトラクションとして北海道大学オーケスト

\* 海洋研究開発機構 深海研究部

\*\* 東海大学海洋学部

\* Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology

\*\* School of Marine Science and Technology, Tokai University

表 1 参加者数の概要 .

参加者合計 (内訳)	4,618 名
国内参加者	1,984 名
国外参加者	2,167 名
同伴者	177 名
非参加登録者	70 名
展示参加者	80 名
歓迎式典参加者	140 名

参加国数 78 カ国・1 地域

ラによる演奏が行われたほか、一部の参加者にはレセプションで両陛下と歓談する機会を持っていただくことができた。

一方、市民向けプログラム(アウトリーチ活動)にも力を注ぎ、IUGG 参加者の協力により、北海道各地での出前授業、IUGG 会場での市民大学、中学生ミーティングなどが行われた。また同伴者プログラムとして、市内観光や着付け・料理講習会・茶会などが開催され、共に好評であった。アウトリーチや同伴者プログラムでは、特に札幌国際プラザの多大なる協力を得た。

展示会場では、国内外からの研究機関および企業 49 団体による展示が行われた。その中でも、特に日本の地球科学の全分野にわたる 17 研究機関による展示を通じて、最新の成果を世界に発信することができた。7月2日には、天皇皇后両陛下がこれらの展示を御覧になった。

この会議を日本で開催したことは、宇宙空間から大気海洋、地球内部まで、幅広く国際的な議論および情報・意見交換ができたという点で、大きな意義を持つ。また日本の研究者・研究機関の能

力を世界に発信することができ、今後この分野の研究促進に多大なる貢献をした。

なお、本総会の直前に発生した新型コロナウイルスに対応するため、発症国からの参加を一部制限すると共に、参加者の健康状態を一人残らず管理することになったが、参加者の協力で問題の発生なく終了できた。次回(第24回)大会はイタリアのペルージャで、2007年に開催されることが決定された。

開催にあたっては、参加者の登録費に加えて、共同主催者である日本学術会議からの分担、開催地である札幌市と北海道からの補助金、東京地学協会をはじめとする諸財団からの助成金、展示収入、そして企業および個人からの寄付金により、総支出の約3億5千万円を賄うことができた。また、行幸啓関連では、日本学術会議・北海道をはじめ関係団体、および札幌国際プラザ、ロイトン札幌の御協力があった。本総会の成功は、北海道、札幌市、札幌国際プラザ、ロイトン札幌、ボランティアの方々、ICS、そして寄附をいただいた団体・個人の方々、IUGG 事務局および7協会、本総会共催の日本学術会議および関連16学会、また後援をいただいた文部科学省、経済産業省、日本放送協会、海洋科学技術センター(2004年4月1日より独立行政法人海洋研究開発機構)等の多大なる御協力・御支援によるものである。

#### 注

- 1) 日本測地学会、(社)日本地震学会、日本火山学会、(社)日本気象学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、水文・水資源学会、日本水文科学会、(社)日本雪氷学会、日本海洋学会、日本惑星科学会、日本陸水学会、日本地球化学会、(社)土木学会、日本地下水学会、日本温泉科学会、(社)砂防学会、日本地球化学会